

「ふく笛」復刻ホーホー

「幻の玩具」とも呼ばれている山口県・下関名物のフグの形をした「ふく笛」が復刻された。オリジナルは1935年、実業家で美術品の収集でも知られた河村幸次郎氏(1901〜94年)のデザイン。下関市立美術館の開館30周年に合わせて復刻させようと、陶芸家や工学研究者が無償で尽力した。

(古藤篤)

下関「幻の玩具」

河村氏は下関市で呉服店を経営する傍ら、美術品を収集したり、オーケストラを結成したりして、文化振興に力を注いだ。35年には「下関郷玩同好会」を結成、地元の名産になる郷土玩具作りにも取り組んだ。

河村氏は、同好会の会誌「河豚笛」で鈴や張り子などのデザインを発表し、約10種類の郷土玩具を制作。特に気に入っていたのが、大きな黒目で愛らしい姿をした「ふく笛」だった。尾びれ部分の穴から息を吹き込むと「ホーホー」と優しい音を奏でた。ただ現存が確認されているオリジナルはわずか数個。制作した福岡県の博多人形師も見つか

陶芸家、工学教授ら無償で尽力

㊦ふく笛をデザインした河村氏(下関市立美術館提供) ㊧ふく笛に絵付けをする原田さん(4日、福岡県福津市で)



らず、作り方も残っていないため、幻の郷土玩具と言われてきた。

復刻は、河村氏が美術品を寄贈した同市立美術館が

記念展を開くのを前に、河村氏の長女・美代子さん(70)(東京都目黒区)が発案。計画を知った沖縄県石垣市の陶芸家金子晴彦さん(52)が、「地元の人々が待ち望んでいる玩具を後世に残そう」と、プロジェクトを引き受けた。

金子さんは、3次元コンピュータ利用設計(CA

D)に詳しい知人の渡辺仁史・早稲田大教授(65)(建築人間工学)に依頼し、現物の表面をスキャンして、厚みやへこみ具合、吹き口の角度などを数値化した正確な設計図を作成した。

これを基に、長崎県窯業技術センターが石こうの型を作製。博多人形に使う特殊な土を型に流し込んで成形した後、金子さんの窯で仕上げた。絵付けは、福岡県福津市津屋崎で人形工房を構える原田誠さん(61)が顔料やかわなどを混ぜた塗料を用意して指導した。

美代子さんは「完成した時はうれしくて涙が出た。地元の人に昔のままの音色を懐かしんでほしい」と喜び、金子さんも「伝統工芸と最新技術が結晶し、文化を絶やすことなく、次の世代につなぐことができた」と話す。

記念展「河村幸次郎と美の世界」は14日〜12月23日(最終日を除く月曜休館)。初日は来場者200人にふく笛を無料で配る。問い合わせは下関市立美術館(083・245・4131)。